

せいじいさんを思う



入来院重朝

先日、宮下亮善師から、西南之役一四〇年・明治維新一五〇年記念『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』除幕式及び式典の御案内がきました。期日は九月二十三日（祭日）です。彼が相当前から云っていましたから、いよいよやるかと私は思いました。

さて、私は参加出来るかどうかハタと思いました。と云うのは、昨今、足腰が弱っていて特にヨチヨチとしか歩けない状態の上、数ヶ月前発症した膀胱炎が完治していず、前立腺肥大のためショツ中尿意をもよおすのです。始末が悪い。夜中は一時間おきにしたくなるのです。だから、手許にしびんをおいている

のです。

そんなわけで折角の式典に参列はムリかなと思つてるところです。残念です。それはそれとして、昨今、私は明治維新についていろいろ考えていました。というのは、明治以来日本に「公儀」という言葉をきかなくなつたからです。ご公儀とはマサに江戸時代の日常を取りしきつていたコトバではないか。私たちが少年の頃から日常はマサに私儀次第であつたというおもむきが強い。何故か、武家社会がつぶれて、明治以来道徳はサマ変りしたのです。そもそも明治政府はすなはち長州政府です。政府の中枢をにぎつたのは即ちサムライ以下の分ざい、その大親分の山縣有朋がその典型です。すべて目に入るものは私物化するつまり日本国そのものを私物化したのです。

西郷さんは一体何をしていたのかと思いま

す。マカタンシと城下士からサゲスマレながら、西郷さん一党は結局当時の日本の時局の大転回をなしとげたのです。それは何をもつてか。かの有名な「赤報隊」です。この赤報隊の活躍なくしては維新の大業はありえなかつた。つまりこの「赤報隊」の生みの親は西郷さんであり、マサに暴力団の大親分であつたのです。つまり西郷さん抜きでは明治維新など夢の又ユメだったので。こうして出来あがつた明治政府はさきに云つた通り、長州の小ワツパ不良集団にのつとられたのです。つまり公儀のココロなどアブクの如く消しさられ、無学無教養のヤカラが、やりたい放たれをなしとげたのがつまり明治政府でした。

これらのことは、原田伊織著の「明治維新という過ち」という著書を読むと全く感銘を一つにします。

さて、現在の日本は当然明治政府つまり明

治の世界と密接不可分につながっています。私の父も母も明治生まれでしたし、私の子供時分は西南戦争はついこの間のことの如く田原坂の死闘などは日常ウタに歌われています。すなわち「雨は降る降る人馬はぬれる。こすにこされぬ田原坂」です。日清、日露の戦争も支那事変に始まる大東亜戦争も明治維新の大仕事と密接に不可分につながっています。明治政府の夜郎自大さそれ自体が江戸時代までの日本人を一皮むいたモノでした。つまり日本人とは何かという永遠の命題なのです。長州政権がつくりあげた「明治」天皇像は四代にわたって現代の天皇まで続いています。天皇とは何かとは永遠の日本のナゾです。

さて、維新の大業をなしとげた我らの西郷南洲は一体何をしていたのか。マサになぞで

す。そもそも西郷さんそれ自体がナゾです。そ

もそも西郷一族、それ自体全くのナゾです。

薩摩へコなどでは全くなかった。彼等は

「易断者^{ユクモン}」と幕末当時陰口されていたのです。

いわゆる普通の日本人では全くない。彼等は皆偉丈夫で、背丈は皆六尺ゆたか、堂々たるものです。大久保一蔵はユタモンの中で一人変り者でした。西郷さんがすることがなくなつてぼんやりしている間にみるみるうちに明治政権の一角を占めるに至つたのです。彼はつまり普通の日本人の秀才並みの才幹だった。西郷さんと決して仲たがひしたわけではない。西郷さんはすることもなくぼんやりしているうち彼の血の一角がうずき出したのです。つまり世間で云う「征韓論」であります。彼は大陸に勇飛せんとする血がうずき出したのです。日本での役割は彼は十分果たしたのですから、これはやむをえない。結局彼の処遇をよくするだけの大丈夫が時の政権にいなかった

たわけです。つまり普通の日本人は優等生、

秀才はたくさんいるけど、度量を比較するすべを生来持つていません。結局西郷さんは周囲から誰からも理解されず、恐らく愁然として故郷鹿児島に帰郷したのです。翌明治七年四月には江藤新平の乱で彼は即刑死です。六月に西郷私学校設立。だんだん雲行きがおかしくなります。彼がなぜ私学校をつくりたくなつたのか、恐らく淋しかったのだらうと思います。私学校とはそもそも何か、要するに彼の抱懷を誰かれにきいてもらいたい場です。彼にはファンが全国的にたくさんいます。そもそも彼のユタモン一統はこの私学校の中核であり、彼のファン賛同者が蝟集したのです。彼に一日会えば一日の愛が生じ要するに彼の存在そのものがナゾなのです。つまり彼は要監視人物ナンバーワンです。もちろん私学校生徒達は彼が政府からにらまれていることは

百も承知です。西郷さん本人がにらまれてい
るとホントに思っていたかどうかわかりませ
ん。もともと彼は政府に謀叛など起そうなど
とはこれっぽっちも思っていなかったと私は
信じています。彼はそんなチツポケな人物な
どではありません。

さて、明治九年十月熊本神風連、秋月、萩
の乱が起ります。十二月、三重、茨城に農民
一揆が起り、世情は乱であります。明治十年
正月早刺客事件、私学校党草牟田火薬庫事
件、二月二日銃砲彈藥製造所襲撃事件、同三
日西郷小根占より武村自邸へ帰る。同十五日
西郷軍出発。三月四日篠原国幹田原坂戦死。
同二十四日田原坂失陥以後人吉、宮崎、佐土
原、延岡、永井村より可愛岳包圍突破、九月
一日鹿児島に入り二十四日城山陥落、西郷以
下自刃。

さて、最後に

松浦玲の言葉を紹介します。

「腐敗墮落した大久保であった……。
西南戦争は、いろんな要素が混在してい
ちがいに定義しがたいけれども、という
大久保専制に対する正面からの糾弾という一
面を（西郷が）もったことはまぎれもない。
しかしその最後の戦いも西郷流であった。あ
らゆる術策を弄してでも勝とうとは思って
ない。百年の後に「正道」が受けつがれれば
よいと、はるかな将来に望みを託したのであ
ろう。果たして百年目、西郷評価の機運は濃
いが、それは今の政治のどこにつながって
いくのであろう。」

（六月五日記）

（炬ばたセイ談庵主）

